対応推論と集団心

唐沢かおり
東京大学人文社会系研究科

2010.1.30＠九州大学教育学部

何を考えてきたか

- 社会心理学は「個人」からデータを取り、それを元に「個人のこころ」について語る
  - 個人焦点の方法論
  - 集団心などは否定してきた
- その功罪を考えると、集団心を扱う方法論の可能性を検討してみてもいいんじゃない？
  - 知覚者として、私たちは、集団に個人には還元できない心的属性を見出している
  - 集団研究の拡張につながるかも
  - 広がる応用研究の可能性？

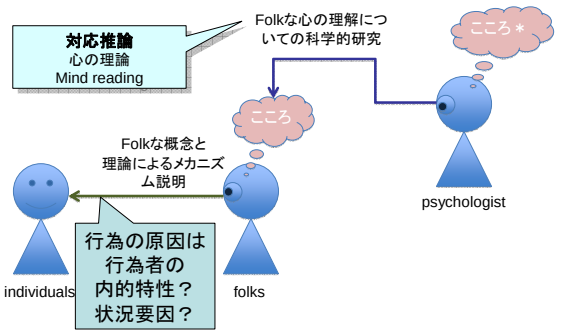
とりあえずの結論＠中部哲学会1

- 集団心は存在しないということを、社会心理学者は、当然のこととして受け入れてきた
- しかし、個人の心は実在するが、集団の「心」は実在しないということを示す哲学的議論はおそらく存在しない･･･らしい
- ならば、いったん集団心の存在を認めてみる･･･

とりあえずの結論＠中部哲学会2

- なぜ対応推論と集団心なのか
  - 社会心理学の作業と「対応推論研究」の対比を考えてみると
  - 対応推論研究の集団バージョンの充実が「集団心研究」につながる可能性があるように思える
- そのために必要なこと
  - この直感に根拠を与える作業
  - 実現に向けての議論の整理

対応推論研究とは



©トダヤマ:一部改変

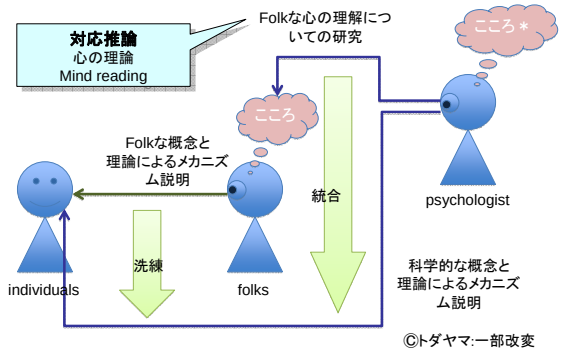
確認事項
対応推論研究のアイデンティティ

- 教科書的理解は･･･
  - 原因帰属の一分野
    - 他者の行動の原因は？
    - 原因となるDispositionの推論は？
- しかし、
- 対人認知・対人理解の研究であり･･･
- 心の理論の研究であり･･･
- 他者の心を読む（Mind reading)の研究でもある
- 要するに、ある行為が起こった理由を行為者の「こころ」の構成要素・機能の点から説明する

じゃあ社会心理学は？

- 社会心理学の仕事
  - 社会的な場面での人の行動について、それが起こるメカニズムを説明すること
  - 説明項は、「個人の内的な要因（心の働き）」と「状況要因」からなる･･･B＝f(P,E)
- 一方、対応推論研究は
  - 他者の行動の原因のナイーブな理解
  - 「社会心理学の素人バージョン」研究？
- と言うか、社会心理学が、対応推論の洗練された形

心理学者とFolkな心の理解



実は、そもそも社会心理学者だって･･･

- Folksである
  - 研究仮説を考えているときも、当該の行動が起こるメカニズムを「自分の知識と経験に基づいて」考える
  - Folksよりも、分析の道具・すでに示された「知識」を多く持っているというだけに過ぎないかも
  - 社会心理学者の「（個人の）心の分析」は、Folksとしての他者の行動を生み出す心的過程の分析と切り離せない（はず）
- 集団でも同様だと考えて、対応推論の集団バージョン＝集団心の推論を考えれば？

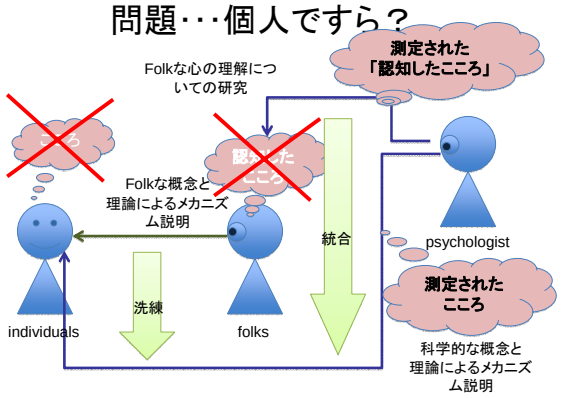
集団心の存在に関する議論からも

- 社会心理学は個人の心の存在を認め、集団心を否定してきた
  - なぜ社会心理学者は簡単に集団心の「存在」を否定できたのか？
- しかし、テツガク者によると、個人の心は実在するが、集団の「心」は実在しないということを示す議論はない
- 集団心の存在を認めたとして、「どこにある」と想定して研究を進めるのか？⇒@推論

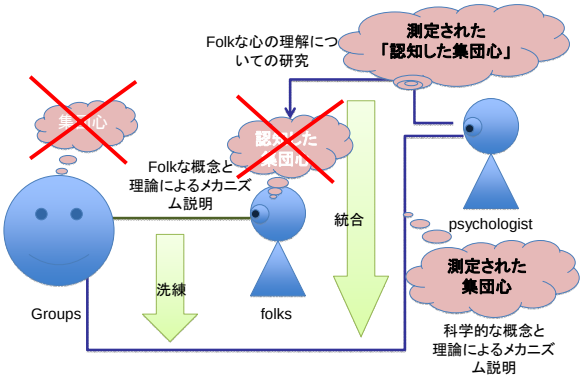
集団心の否定

- 社会心理学は「主観の科学」であり、主観的経験が研究の対象⇒その理解のためには、自分の主観的経験に依拠せざるを得ない
- 科学である以上、一般化した何かを語るが、その知見の了解は「自分の主観」の一般化という形をとる
- したがって、他者にも同様のこころがあるということを認める
- こころを語るための「概念」（思考・感情・意図など）は、自分しか知りえないという点で、個人にのみ属すると思える
- 経験・機能としての位置づけなのだけど、なぜか実在する実体としてみなしちゃう？

まずは「集団心」がどこにあるのか 問題･･･個人ですら？



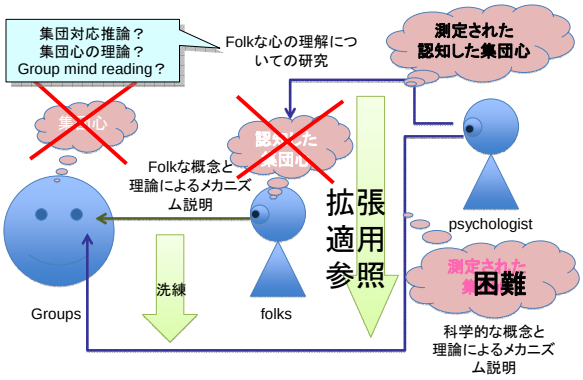
ならば「集団心」もおなじこと



でも、「集団心」の研究は困難でしょ？

- そもそも、あるかないかを論じていたくらいだから、集団心がどのようなものであるのか、その輪郭、構成要素が、個人の心のように定まらない
- 仮に定めたとしても、集団の心理的属性の操作・測定が困難であろう
- いや、できることから、こつこつと・・・

できることから・・・



中部哲学会以降の宿題

- 集団の対応推論を考えるためには
  - 既存の個人レベル対応推論研究知見のレビューと問題点の明確化
  - 社会心理学の「こころの理解の仕方」の特性を考える
  - 集団レベルに拡張するために必要なことの整理
  - 具体的な拡張研究への展開

対応推論研究のおさらい
古典（情報処理モデルまで）とそれ以降

集団対応推論研究に向けて…

集団対応推論研究のために

- 個人レベルの対応推論研究をどのように拡張すれば良いのか
- 古典的対応推論研究のおさらい
- それへの批判と近年の対応推論研究の展開
- 集団の対応推論に関する研究の現状
  ・・・を踏まえて
- どのように「集団の対応推論」を検討すれば「集団心」を新たな形で研究する基礎を提供することができるかを考えねばならない

対応推論理論が達成したこと

- 行動に対応するDispositionの推論が他者理解（対人認知）の基本過程として存在するという問題設定
- 対応バイアスの発見
  - 行動を行う十分な外的要因の存在にもかかわらず、Dispositionに行動の原因が帰属されがち
- 状況の力の過小評価に関する考察
- 状況の力を論じた社会心理学の貢献の主張
  - Gilbert & Malone(95)

対応バイアス研究とは･･･

- 人は状況の圧力下に置かれた個人の行動を観察したとき、
- その行動が「状況要因」ゆえに行われたと考えるのではなく、
- その行動に対応する「態度や特性」ゆえに行われたと判断しがち
- なぜそのよう判断が行われるのだろうか？

一般人はどうやら状況の力を過小評価するようだ･･･なぜ？

- 1）状況の制約についての意識の欠如
  - 影響している状況要因は潜在的に存在、例えば聴衆のプレッシャー
- 2）行動に対する非現実的な期待
  - 状況要因の影響力を低く見積もる･･･Milgramの服従実験参加者はもっと抵抗できるはず
- 3）状況に同化した行動のカテゴリー化
  - ワンマン社長の元で働く人の何気ない行動も「へつらっている」と解釈
- 4）特性推論の不十分な修正

古典的対応推論研究の仮定

- 人要因と状況要因が独立に存在し、両者間にトレードオフ関係ある
  - 観察者の目的は単一のDisposition推論
  - 観察者がすべきことは、状況の影響を抽出して取り除くこと･･･割引原理の利用
    - ←古典的パーソナリティ理論とは合致
    - 人には「固有な内的な特性」があり、それが行動を生み出すが、行動の発現自体は、状況要因の存在により左右される
- しかし、一般人の他者の「心・行動の原因」の理解はそんなに単純なのか

人－状況二分法への批判

Malle (04)

- パーソナリティの概念化の変化
  - （Mischel & Shoda, 1995）
  - 目標・動機・意図・特性のダイナミックな関係として概念化した上で、異なる状況ごとでの行動の変動パターンで記述されるべき
- 観察者は行動の原因が単一のDispositionなのか、状況なのかを知りたいのではなく、行為者の動機、意図などが具体的に何なのかが知りたいのでは？
- 状況に関する情報は「除去」すべきではなく、推論に「取り入れられる」べき物

Lay dispositionism仮説批判

Reeder et al (04)：Multiple Inference Model

- たとえば囚人をAbuseした兵士について
  - →Bad barrel(社心） vs. Bad apples(一般）
- 本当に、状況の力を過小評価し行動の原因としてDispositionを重視するのか？
- ナイーブな知覚者も状況の力を認識・評価していることを示すような実験パラダイム
  - 状況に応じた具体的な動機推論→一貫した複数のDispositionの推論
    - Milgramの服従実験で教師役への圧力内容操作→状況の具体的な認知に応じた動機や特性の推論

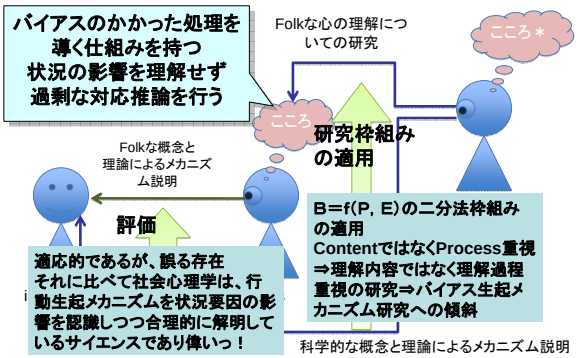
古典的な研究の問題点

- 「人 vs. 状況」の二分法でとらえたときの判断バイアスへの「過剰」な注目
- 社会心理学は、状況要因の影響を検討することで、一般人の「行動生起のメカニズム」理解を超えたモデルを提出しているという位置づけ

↓

- 一般人の「心の理解」を単純視していた

社会心理学の「Folkな心の理解」理解

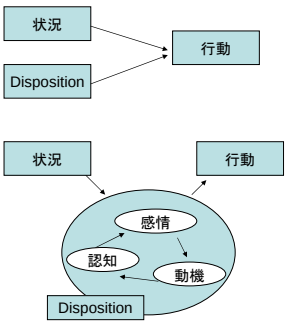


Folksの「複雑」な理解の解明へ

- これまでの問題点
  - 人・状況の二分法と単一の「原因推論」を行うという想定
    - 内容分析についても、二分法でコーディング
    - 自発的な行動説明の状態を把握できない
- Folk な説明の複雑な側面について詳細な分析から特徴を明らかにする必要がある
  - 説明に用いられる概念、知覚者の持つ心の機能に関する理論、説明構築時の心的過程を議論

Perceivers' intuitive theories of trait

Additive schema vs. Complex schema



- 加算＝伝統的帰属理論の仮定
  - 割引理論、状況を越えて共通の特性→平均化、状況一特性スキーマ利用(Reeder, 93)
- より複雑な特性スキーマの提案＝Folk theories of mind（Malle, 01）
  - 特性自体が他の内的概念から構成される
  - 状況と特性との相互作用による行動の生起

Folk-conceptual theory of explanation

（Malle, 04）

- 特性、動機、意図の推論とは、行動の背景にあるこれらの内的過程と、行為者を取り巻く外界の諸要因を関連付ける作業であり、その作業には、人々が暗黙に持つ心の理論が用いられるとする
- 行動の説明過程を把握するには、その原因を「内的か外的か」で評定させるのではなく自然言語の分析が必要
- 一連の研究で、行動観察時の思考過程を自由記述させ、その内容を分析→従来と異なるカテゴリを提出

説明内容の分類カテゴリー

- 意図的行動と非意図的行動を区別
- 意図的行動
  - 理由説明：reason explanation
  - 理由説明の因果歴史：causal history of reason explanation
  - 可能要因説明：enabling factor explanation
- 非意図的行動→原因説明のみ

理由説明

- 意図した行為をする理由や意図的に行為する理由
- 意図形成の根拠となる行為者の心的状態、主には、信念、欲求として概念化される
  - 信念(beliefs)＋Mental state marker
  - He started a diet because he thought he had gained too much weight
  - 欲求(desires)
  - Why did she turn up the volume? --- To make her brother mad.
  - 主観的に気づいていて合理的であるという基準を満たす（Subjectivity and rationality）

理由の歴史説明

- 行為者の理由の背景にある要因
  - 理由の背景にある性格、文化、状況など、理由に至った要因
  - Why Japanese businessmen work so much? --- it's part of their culture
  - Subjectivity 基準によるCHR分類
  - One might think she hired Smith because he was the best candidate for the job, thought her action was considerably affected by her unacknowledged racism

可能要因説明

- 行為者の理由や意図を前提とし、意図したように行動がなされたことを可能にする要因を述べたもの
- なぜ行為者が行為を意図したかを明らかにするものではない
- この説明は、Why 質問ではなく ”How possible?”に対する答え
  - Kay worked all though the night because she had a lot of coffee

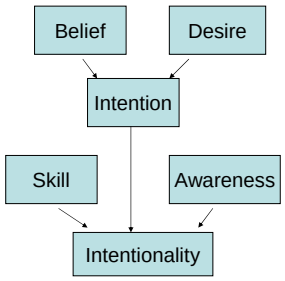
Why the chicken cross the road

- Captain Kirk: To boldly go where no chicken has gone before （RE）
- Ernest Hemingway: To die. In the rain.（RE）
- Aristotle: It is the nature of chicken to cross roads. （CHR）
- Darwin: Chickens, over great period of time, has been naturally selected in such a way that they are now generally disposed to cross roads （CHR）

- B.F. Skinner: Because the external influences which had pervaded its sensorium from birth had caused it to develop in such a fashion that it would tend to cross roads, even while believing these actions to be of its own free will.

意図的行為のこころのモデル

- 行為者が結果への欲求を持つ
- 行為が結果につながるという信念を持つ
- 行為を行う意図を持つ
- 行為を行うスキルを持つ
- 実行時に意図を実現していると気がついている



Malle & Knobe, 97

集団の対応推論研究

現状のレビュー
↓
いずれも参照すべき研究としては弱い？
研究を進める上での基本的問題が解決されていない
↓
でも、できることからこつこつと・・・
できるのか？

研究を進める上での基本的問題

- 古典的対応推論の枠組み(disposition vs. situation)はおそらくそれほど有効ではないだろう
  - 簡単にできるけど←やってみる？
  - 具体的な推論内容を、内容分析等を重視ながら検討していく？
- どのような集団を扱うのか・行動を扱うのか
  - 「集合(aggregate)」ではなく「組織」限定？規模は？
  - 行動一般という問題設定は可能か？
    - 「達成系」と「道徳的行動系」？
- 認知・感情・動機・特性に相当する構成要素の同定
  - 構成要素の概念化と測定方法の開発につながる形で・・・
  - 組織の種類ごとに作成が必要な可能性

既存の集団対応推論（関連）研究

- 対応推論の文化差
  - 東洋人は集団の行為を特性帰属しがち(e.g., Chiu et al., 00)
    - ←集団のEntitativity・Coherence知覚、集団主義＝集団を行動ユニットと見る）
- 集団の特性認知
  - 集団ステレオタイプ・EntitativityやVariability　の認知（⇒集団に対する敵対的行動・偏見）
    - 「集合」集団が対象となることが多い
- Folk-conceptual theoryの集団拡張(O'Laughlin & Malle., 02)
  - 集団の行動はReasonではなくCHR、ただし「集合集団」×ステレオタイプ的知識保持時
  - まずこれ？

自由記述の内容分析からといっても

- 何の指針もない状態では、分析は不可能
  - 理由説明とCHRの分類は、ある程度適用可能に思える
  - 「具体的な構成要素」を拾い出す作業が大変かも
    - Mental state marker（個人の場合は構成要素に対応）自体を拾い出すことは可能かもしれないが、「ただの擬人化」に過ぎない？
  - 理由説明よりCHRを引き出すような工夫が必要かも知れない
    - 日常説明と科学説明の目的・対象の対比

目的　Connection vs. Selection

- 科学：一般化可能な因果関係に関する叙述を求める…タバコを吸うと癌になる
- 日常：特定の出来事がなぜ起こったのかを説明する…Aさんの癌の原因は？タバコ？
- 事象間の因果接続の確立か特定の出来事の原因選択か
  - Causal connection vs. Causal selection (Hesslow, 88)

対象　Normality vs. Abnormality

- 科学：何が世界の中で**通常の状態**として起こるのかに関する知識（法則）としての因果関係
- 日常：**異常な出来事**の原因説明
  - 自発的な原因帰属は予期しない結果、望ましくない結果のとき生起　(e.g., Lau & Russell, 80)
  - 通常ではない異常な状態が因果説明の対象となり、原因として異常な条件が探索される
    - Abnormal Conditions Focus Model (Hilton & Slugoski, 86)

「集団心」研究の困難と同じ問題？！

- そもそも、あるかないかを論じていたくらいだから、集団心がどのようなものであるのか、その輪郭、構成要素が、個人の心のように定まらない
- ･･･という問題は、集団対応推論研究にも実は当てはまること？
- 金沢ではどうしてあんなに楽観的だったんでしょうね･･
- ただし、測定の困難は関連しない
- 行動、組織を絞れば、具体的な「行為の理由」となる構成要素は限定されるので、リスト化は可能
  - 会社組織の「不正の隠蔽」とか？

集団対応推論研究の当面の課題1

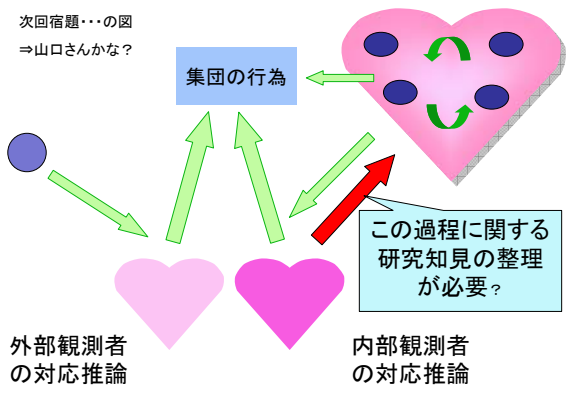
- 研究に効果的な場面を設定し、反応カテゴリーのリスト化を行う
- 拾い出した構成要素について、個人の場合との概念的相違を検討する
  - 個人の場合は「主観」や「測定尺度」の裏づけがあるが、集団では？
  - 集団における構成要素が何者なのか、擬人的表現ではなく、実体を与える作業
  - 例：「恥」だとおもった・会社の「体質」だ・・・・

集団対応推論研究の当面の課題2

- CHRを引き出すための工夫
  - 「理由」の多くは行為者の「気持ち（主観）」
    - ←Mental state markerが多用されるが、集団ではその妥当性があやうい？
    - いずれにせよ、行為を生み出すプロセスに関する推論を引っ張り出したい
  - 「理由」の理由（CHR）を引き出す⇒Causal chainを問うという手法？
- そもそも集団にAgencyが付与される条件の整理が必要か？
  - 集団の特性知覚研究、特に、variability, entitativity 研究

整理すべき混乱

- 集団心復活プロジェクトにおいて求めているものは？⇒対応推論研究がどう貢献するのか？
- こころを行為を生み出す「機能の集大成」としてみると
  - 集団の行為の生成過程に関するFolksの理解の解明＝行為を生み出す集団の機能的要素に関する理解の解明？
  - いわゆる古典的小集団行動研究のFolks版とどう違う？
    - 一緒ならFolksに聞かずとも良い
- 集団対応推論研究は可能（やや強引だが）だが、それが復活プロジェクトに対してもつ位置づけは、もうちょっと詰めたほうがいいかな

別の視点からの位置づけと宿題

- 内部観測者の行う集団対応推論とグループダイナミックス現象の関係？
  - 集団内にいるメンバーのダイナミックス（集団心）により集団の「行為」が発生
  - その行為に対する、メンバーの行う「集団対応推論」は、おそらく次の時点でのダイナミックス（集団心）に影響するはず
  - 集団対応推論に着目するもうひとつの（テクニカルな問題の回避のためではない）理由